

Title	岸本直文著：『倭王権と前方後円墳』：(塙書房、20年6月刊)
Author	青木, 敬
Citation	市大日本史. 24 卷, p.135-142.
Issue Date	2021-05
ISSN	1348-4508
Type	Article
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学日本史学会
Description	

Placed on: Osaka City University

【書評】

岸本直文 著

『倭王権と前方後円墳』（塙書房、20年6月刊）

青木 敬

一 本書の構成と内容

本書は、著者が二〇一四年に京都大学大学院文学研究科へ提出した博士學位請求論文を改稿し、上梓したものである。著者が長年探究をすすめてきた大型前方後円墳の墳丘築造規格にかんする行論や、古墳の代表的な副葬品である三角縁神獸鏡をはじめとする青銅鏡の編年とその製作者の解明、さらに埴輪などの研究成果も取り込んだ論考などから倭国史を紐解き、王権の確立とその構造にまで論及した本書は、随所に具体的かつ重要な指摘がなされ、分かりやすさに配慮した美麗かつ的確な図面も含めて読み応え十分である。

検討対象となった前方後円墳のうち、数基は評者も調査に参加する機会をいただき、著者の警咳に接する機会をえた。そうしたなかで、本書に所収された主張のいくつかは、評者も著者から直接拝聴する機会に恵まれ、いつの日かその議論を集約した著作を待望していた。そして、ついに本書の刊行によって著者が展開する論の全体が俯瞰できるようになった。古墳研究のなかにおいて本書刊行の意義は大きい。では、以下に本書の内容を紹介し、いくつかの論点について評者の私見を交えつつ、書評の責を果たしたい。はじめに、本書の構成は次のとおりである。

- 序 章 「倭王権と前方後円墳研究の課題」
 - 第1章 「倭の国家形成と古墳時代開始のプロセス」
 - 第2章 「三角縁神獸鏡製作の工人群」
 - 第3章 「三角縁神獸鏡の編年と前期古墳」
 - 第4章 「前方後円墳の系列と変遷」
 - 第5章 「前方後円墳の墳丘規模」
 - 第6章 「箸墓古墳の墳丘と相似墳」
 - 第7章 「桜井茶臼山古墳の歴史的意義」
 - 第8章 「メスリ山古墳と祭政分権王制」
 - 第9章 「行燈山型の前方後円墳」
 - 第10章 「渋谷向山型の前方後円墳」
 - 第11章 「佐紀古墳群と半島派兵」
 - 第12章 「玉手山古墳群・松岳山古墳群と河内政権」
 - 第13章 「前方後円墳の2系列と王権構造」
 - 終 章 「前方後円墳と古墳時代史」
- 序章では、古墳時代が倭の国家形成の時代と規定し、倭王権の成立にかかわる先行研究を整理する。さらに本書の中核的な対象資料となる前方後円墳研究の現状と課題をあきらかにしつつ、相似墳や設計原理にかんする研究の問題点を指摘し、墳墓が国家形成過程を知る重要

な手がかりとなるとした上で、本書の方向性を明示する。

第1章では、炭素14年代法の較正年代を用いて土器型式に年代観をあたえ、ヤマト国（＝邪馬台国）の形成が弥生時代後期、二世紀前半にヤマト国の本拠地として纏向遺跡が成立し、二世紀中頃にヤマト国王墓として前方後円墳が創出され、二世紀後半になるとヤマト国が求心力を高めてくると説く。すなわち、ヤマト国をはじめとする広域地域圏が形成された弥生時代、続く古墳時代は倭国が成立した三世紀代前半にはじまり、纏向型前方後円墳が広域で共有されたことを主張する。

続く第2章と第3章では、三角縁神獸鏡の検討と考察がおこなわれる。第二章で神獸像の表現に着目し、三つの製作者集団が存在したこと、それぞれ関係をもちながら変化していったこと、加えて製作には一定の年代幅があることをあきらかにする。そして第三章では三角縁神獸鏡の編年案と実年代を提示し、そこから箸墓古墳の被葬者が卑弥呼であると結論づける。

第4章以降は、倭国王墓として築造された前方後円墳を共有することが制度化し、墳形が身分秩序の表象であること、そして倭国が祭政分権王制を採ったことを、具体例からあきらかにしていく。

第4章では、起点となる箸墓古墳から五条野丸山古墳にいたる倭国王墓である巨大前方後円墳の築造規格を検討し、同一設計による相似墳が認められるものを「○○型」と設定し、それぞれ前代のもを更新しながら変遷していく過程をあとづける。そして墳丘築造規格には、箸墓古墳からはじまる主系列、桜井茶臼山古墳に端を発し、岡ミサンザイ古墳まで続く副系列の二系列に大別され、双方が古墳時代中期末頃まで併存すると論じる。

第5章は、前方後円墳の墳丘規模に序列が認められると説く。具体的には、中国尺の六尺＝一步の五歩刻みで墳丘規模が設定され、墳丘規模による厳格な身分秩序が形成されていたとする。なお、中国尺は前期から中期前半までが漢尺（一尺＝二三・一センチメートル）、中期後半以降は一尺＝二五センチメートルの尺度へと変わり、七世紀代まで続くとする。

右の二章で倭国王墓が規格と規模の序列にもとづき、更新しながら相似墳の築造をおこなうが、これを前方後円墳共有システムと規定し、第6章以下で代表的な倭国王墓の築造規格の詳細を検討する。第6章では箸墓古墳、第7章で桜井茶臼山古墳、第8章でメスリ山古墳、第9章で行燈山古墳、第10章で渋谷向山古墳をそれぞれ検討の俎上において墳丘築造規格を復元し、その上で各地に分布する相似墳をあきらかにし、その関係性に論及する。さらに、前述した墳丘築造規格の主系列・副系列の二系列が、それぞれ神聖王と執政王とことなる性格をもつ王が並立するという倭国の王権構造を復元する。

第11章で著者は、まず王権の本拠地が奈良盆地東南部から北部へと移動したと考え、佐紀政権と呼称する。そして王権本拠地の奥津城である佐紀古墳群の倭国王墓を検討対象とし、最古の佐紀陵山古墳がほぼ同時期の渋谷向山古墳の三分の二規模の副系列につながる相似墳と位置づける。さらに佐紀陵山型の相似墳が五色塚古墳や久米田貝吹山古墳など大阪湾岸や、網野銚子山古墳の丹後半島などに分布することをふまえ、倭国が海上交通を掌握していったことと朝鮮半島への倭軍派兵などと関連した事象とみる。

第12章では、河内を代表する前期古墳である玉手山古墳群と松岳山古墳の墳丘を検討する。まず玉手山古墳群のうち、時期の古い順に九

号墳が桜井茶臼山型、三号墳が西殿塚型、七号墳が行燈山型、一号墳が洪谷向山型と、更新された相似墳が繰り返し築造される状況をあきらかにする。ついで、玉手山古墳群と交替するように出現する松岳山古墳だが、特殊な構造を有し相似墳を特定できないが、佐紀古墳群との関連性が強いととらえ、佐紀政権から送り込まれた人物が被葬者ではないかと推定する。

第13章では、第四章で提示した倭国王墓にみられる墳丘築造規格の二系列を再論し、「卑弥呼以来の祭祀を司る倭国王」を神聖王、「軍事権を含む政治的権力を握る王」である執政王と既往の研究でも指摘されてきた聖俗二重王権論に近い結論を導出する（二六八頁）。さらに、古墳時代中期の古墳まで二系列が継続すること、上石津ミサンザイ古墳・誉田御廟山古墳の副系列に属する二基が優位となる段階が転換し、大仙古墳という主系列墳が優位となる状況を指摘し、履中系から允恭系への転換と連関すると説く。

終章では、前章までの検討結果をまとめ、連合体からはじまった倭国が、幾多もの変動を経ながらも、古墳時代をつらぬく前方後円墳共有システムを機能させながら次第に権力を強めていくと主張する。さらに前章でも言及した祭政分権の王制が、王権内部に競争をうむ状況をつくりだしたが、倭国王の本質は祭祀的機能をもつ点にあると主張する。しかし、こうした祭政分権の王制は、六世紀に一本化することになったが、正史編さんが倭国王を一本化して記述して整序することに最大の課題があったと述べて稿を閉じる。

二 本書の内容にかかる私見

前方後円墳から国家形成期を読み解くとの指針のもと、前方後円墳

の墳丘測量調査を長く続けてきた著者が、大王墓クラスの巨大前方後円墳の相似墳を見出し、数多くの比較検討をつうじて前方後円墳の共有システムという従来にない新機軸を提示した。さらに、前方後円墳の形態的特徴を王権構造や歴史的動向と関連づけた本書が与えるインパクトは大きく、ここに前方後円墳研究の新地平が切りひらかれたといっても過言ではない。

墳丘測量図をもとにした築造規格の検討は、その精度が重要であること、加えて十分な精度つまり大縮尺の墳丘測量図を用いた緻密な先行研究は、甘粕健の「前方後円墳の研究」が随一であることを著者からうかがったことがある。その言葉を自ら実践すべく、著者は時に発掘調査や墳丘測量も実施し、高精度な墳丘測量図の作成から墳丘築造規格を復元し、そこから先述した機軸を打ち出したため、本書の主張の説得力が増している。既存の測量図を用いるレベルにとどまらない、徹底した基礎研究が本書の根底に貫かれている。つまり、祭政分権の王政や前方後円墳共有システムといった斬新な主張ばかりだけが、本書の価値ではないことを強調したい。基礎研究に裏付けられた研究姿勢は、後進であるわれわれも大きな指針をあたえることとなり、直接的な内容以外の部分にも本書の価値の一端がある。後半の章の多くが、著者自らが担当した発掘調査や測量調査の報告書で披見した考察をベースにすることからもあきらかであろう。

ただ、本書で展開されている主張に対し、いくつか疑問や課題を感じた部分もあった。以下、評者の卑見を織り交ぜつつ列挙したい。

年代観と被葬者の特定 本書は、三角縁神獣鏡の精緻な編年観を提示し、対象とする前方後円墳の築造年代をもとめ、そこから築造年代に近い没年の大王らを比定し、大王墓の相似墳を特定して相関性を考

察することで、前方後円墳共有システムを提唱するなど、著者の王権論を開陳すること、これが本書の掲げる大きな目的のひとつであろう。

ただ、現状の考古学研究において、被葬者の特定はどの程度可能なのか。換言すれば、被葬者を特定できる精度は確保されているのだろうか。著者は、炭素14年代法による較正年代も積極的に採用するが、実際の年代については庄内式の初頭で六〇年前後古いとの異論もある（久住二〇一七など）。こうした数値年代のずれを残したまま被葬者を特定することは、どれほどの正確性が担保できるのか、検討の余地を残していると感じた。これは、石室をはじめとする埋葬施設および副葬品の型式と埋葬年代が、必ずしも一致しない点ともかわる。

昨今の古代史研究において考古学と文献史学との協業が、重要かつ不可欠であることは多言を要しない。ただし、研究成果を援用すること自体は、「考古資料の解釈に際して、考古学研究者が史料批判抜きに安易に文献史料を使」うことへの懸念に心えるだけの考証が必要となる（白石二〇一三、二頁）。かりに被葬者を具体的に特定したとしても、従前の文献史学による考定を覆すに足る検証がなされていることが不可欠だが（高橋二〇〇五・小澤二〇一四など）、著者が示した被葬者の比定にかんする議論については、慎重を期したほうがよいと思う。

佐紀王権の評価 加えて本書では、被葬者の特定のみならず、王権の評価についても一考の余地があるように感じた。すでに小澤毅が指摘するように、同時代最大の前方後円墳は大王墓である、という仮説を鵜呑みにしてよいのかという疑問がある（小澤二〇一四、一六四頁）。一例として、佐紀の地に巨大前方後円墳が所在することをもって、そこに王権が所在していたと説く本書での主張に対する評価ともかわる。そもそも、巨大古墳は王宮の近くに営まれたのだろうか。下垣仁

志は、佐紀や葛城に巨大前方後円墳が築造されるようになることを、「巨大古墳の造営に適した自然地形が不足するにいたり、畿内中枢力の主要構成集団が本貫地近辺に墓域を移動させた結果」と推測し、王権所在地と奥津城が必ずしも近接しないことを示唆する（下垣二〇一九、二二〇頁）。古墳時代の宮殿遺跡が未解明な状況下、王墓が王宮とセットになるのか断定しがたい現状をふまえると、佐紀王権の存在を前提とした議論についても、例証を欠く現段階では、つとめて抑制的であるほうがよいかもしれない。

相似墳の評価 本書の前半で、著者は墳丘築造規格が倭国王の交替ごとに更新されると論じる。美作地域の前方後円墳を検討した澤田秀実の研究でも、近畿地方の大王墓クラスの前方後円墳で墳丘型式が更新されると、美作地域でも墳丘型式がその都度更新されるという（澤田二〇一八）。常に最新型式の墳丘築造規格が共有されるありようは、まさに著者の強調する前方後円墳共有システムの名にふさわしい。

他方、こうしたシステムは列島各地に敷衍できるのか、検討を要する課題だろう。例えば群馬県では、太田天神山古墳（五世紀前半）の築造を契機として、古市古墳群の墳丘築造規格が導入される。しかしながら墳丘築造規格は更新されることなく、六世紀後半の綿貫観音山古墳まで、つまり前方後円墳の終焉までこの規格が用いられ続ける（若狭二〇〇七など）。近畿地方とのかかわりが強いとされる群馬県ですら斯様な状況にあることは、裏を返せば著者が説く前方後円墳共有システムに地域差があることを暗示する。こうした点をふまえ、地域差をいかに理解するか言及すれば、より実態に即した言説となるだろうか。

そもそも墳丘の築造は、一様に最下段から開始したと理解してよい

のだろうか。というのも、わざわざ湧水がともなう周濠を掘削してから墳丘構築をおこなうのか、といった疑念が払拭できないためである。評者は墳丘中段以上をまず構築し、最終的に周濠部を掘り下げるのが合理的な施工と考える。つまり、すべての巨大前方後円墳の設計基準が下段にあるとする前提について、今一度検証する余地があるように思う。加えて安村俊史が説くように、墳丘下段での比較検討には、後世の改変や高低差などに起因する制約がともなうことも忘れてはならない(安村二〇一一)。ちなみに安村は、玉手山一号墳が著者の主張する渋谷向山古墳の相似墳とするよりも、墳丘二段目以上の形状はメスリ山古墳に類似すると指摘する。これは出土埴輪にもとづく玉手山一号墳と七号墳との前後関係にかんする議論ともかかわってくる問題だが、こうした相似墳の認定に異論がある古墳では、築造規格の認定方法が問われることになる。発掘調査がおこなわれた古墳ですら、こうした問題が介在するとあきらかになったことで、墳丘築造規格復元における課題がより明白になったともいえよう。

後期古墳の評価 蛇足だがもう一点、本書では後期古墳にかんする言及が少なく感じた。磐井の乱や武蔵国造の乱といった各地の有力者層との軋轢を抱えつつ、ミヤケの設置や国造制の成立など、その後王権の政治支配に深くかわる歴史的事象が数多く生じたのが六世紀である。評者も専門とする古墳の墳丘をみても、対外関係を反映した一群、すなわち評者が説く高大化した墳丘が各地に分布することもその一例である(青木二〇一七)。墳丘に用いられた土木技術も土嚢・土塊積み技法など、新規の技術が定着する地域も少なからずあった。以上の点を瞥見しただけでも、六世紀にさまざまな変革があったことは容易に推察され、前方後円墳の墳丘にいかなる変化をもたらしたの

か、そしてその変化の背景はなにか、王権構造に踏み込んだ著者の見解も披瀝いただければ、本書の魅力はいっそう輝きを増したにちがいない。

そして、神聖王墓と執政王墓の間で前方部の段築数を変えることなどいかなる歴史的意義が介在したのか、そこに肉迫する説明が欲しかったという希望は、評者の我儘だろうか。系列が二分できるから神聖王と執政王に分けられるという論理展開のみならず、たとえば神聖王はなぜ後円部三段、前方部三段という墳丘構造を採ったのかという歴史的な意義について、著者の積極果敢に切り込んでいく言説を期待するのは、評者一人だけではあるまい。

三 祭政分権王制の評価をめぐって

右の神聖王と執政王という著者の主張に対しては、もちろんのこと異論もあろう。ただ、評者は傾聴に値する説と評価する。以下にその理由を述べる。

弥生墳丘墓の技術的延長だけで、あれほどの巨大な前方後円墳を築造できたのだろうか。箸墓古墳の後円部最上段の円丘部の規模は、構築遺跡の主丘部とほぼ同大である。前方後円形の墳墓や竪穴式石室と刳版式木棺など、前方後円墳の代表的特徴の多くは弥生時代に出現する。このほか、特殊器台型土器をはじめとする出土土器の諸特徴や埋葬施設内に朱を多用することなど、大型前方後円墳の築造に弥生墳墓の影響が認められることは、数多くの先行研究に尽くされている。

しかしながら、巨大かつ高度な規格性を具備した前方後円墳の墳丘は、弥生墳丘墓を単に大きくするといった単純な図式で説明し得る構造物なのだろうか。

古墳とは全く時代が異なるが、ペリー来航を契機に築造した品川台場は、配置や構造、形状などはサハルト (Savart, N.) やエンゲルベルツ (Engelberts, J. M.) などの西洋築城書の邦訳本に依拠していた。実際に発掘調査されたいくつかの台場を瞥見すると、配置や形態は、サハルトの *Beginnelsen der versterkingskunst* (1827-28)、『臺台の構造は、エンゲルベルツの *Proeve eener verhandeling over de kustverdediging* (1839) などを参考にしたことがあきらかになっている (浅川二〇〇九)。

これに対し、台場築造に用いられた土木技術は、地杭や切石積の石垣など近世城郭の石垣普請そのものである (東京都港区教育委員会二〇〇二など)。つまり大規模構造物の築造を可能とする土木技術 (工学技術分野) は、在地のそれを踏襲した可能性が高いが、形状や構造については新たな知見が動員されたことも考えられうる。無論、単純に幕末と古墳時代の例を比較するつもりは毛頭ない。ただ、台場の例をみてもあきらかなとおり、従来にはない構造物の設計は、はたして在地の思考や方針だけでなし得るだろうか。評者は、他地域の影響抜きに説明できないと考える。古墳に即しているならば、渡来人ないしは渡来の技術が前方後円墳の築造に関与していた、つまり巨大前方後円墳の出現に大陸の影響が一定程度あったと推測しても、あながち牽強附会の説とはいえない¹⁾。

先学によってすでに指摘されているとおり、箸墓古墳が列島初の巨大前方後円墳と位置づけるのならば、シンメトリックな墳丘の形状を立体化させて施工するには、設計図が欠かせない。さらに、築造に従事した員数と工程は膨大なため、これらの管理なしに築造することも不可能であり、施工管理や監督を担う人材を確保することが絶対的に

必要となる。ちなみに、弥生墳丘墓の多くは地山削り出しだが、墳丘周辺の削土により発生した土砂を使って部分的に盛土するものの、その量は周辺の削土で十分に確保可能である。いっぽう、体積が二六万八〇〇〇立米と推算される箸墓古墳は、その大半が盛土からなり、採土も古墳の周辺だけで充足したとは到底考えられない (北條二〇一九)。以上の点から、箸墓古墳の築造が従来の弥生墳丘墓築造の延長で達成可能かといえ、きわめて難しいだろう。そうなると、前述した他地域の人びとの援けを受けつつ、支配力の強化をめざした王の姿を想起することは、そう難しいことではない。

さて大半が盛土である箸墓古墳に対し、後続する桜井茶臼山古墳は、巨大な墳丘である点が共通するいっぽう、地山削り出しによる点で好対照であり、著者が説くように墳丘もそれぞれ別の系列に属するなど、特徴において異なる点が多い。仔細を述べると、桜井茶臼山古墳の墳丘は、後円部墳頂の方形壇をのぞくと地山削り出しだが、鳥見山から北へのびる舌状の丘陵端部を切断し、前方後円墳に削り出して成形したと推定できる。前述の内容をふまえると、桜井茶臼山古墳は、いわば弥生墳丘墓の築造技術の延長で理解することが可能だろう。つまり築造の特徴からみた巨大前方後円墳には、弥生墳丘墓から続く築造技術を継承した一群と、大陸の影響が強い一群に二分できるのではなからうか。

つまるところ、この二大別こそ著者が指摘する墳丘築造規格の二系列に帰する可能性もあろう。さらに、大陸からの影響の一端として、著者が説く箸墓古墳における漢尺の採用 (一尺二三センチメートル) もこの文脈の中でとらえられてよいのかもしれない (一四三頁)。無論、例証を欠くため、こうした推定の確度を高めるには、大型前方後円墳

の発掘調査成果の充実が最善だが、その実現は容易でないことから、ひとまず現状での試案として提示したい。

さて、それでは桜井茶臼山古墳の地山削り出しにともなう排出土は、いったいどこへいったのだろうか。古代宮都である飛鳥や藤原の地は、膨大な量の土砂によって湿潤な土地を埋め立てて開発したことが発掘調査成果から明白である。こうした点をふまえ、古墳時代の奈良盆地は現在の景観と大きく異なっていたとみて大過なく、湿潤な土地を埋め立てて、人びとの生活や経済活動に資する土地を次第に広げていったとみるのが穏当である。そうなると、桜井茶臼山古墳の築造によって排出された土砂は、古墳周辺地域の開発に供されたと考えるのが無難であり、おそらくは開発と墳墓築造が一体となったプロジェクトだった可能性が浮上する。桜井茶臼山古墳の被葬者が、著者のいう「倭王権を支えた政治的実権を握る人物」（二八七頁）や「王権内の軍事部門を担う存在」（二〇五頁）であるとともに、先の推定をもとに、政治的な権力の強化を図るため開発を主導した有力者の姿を想起するのは、著者の指摘とも親和性が高い。

このように考えてみると、著者が提示する前方後円墳の形状からみた神聖王と執政王という二系列は、傾聴に値する見解であることが諒解されよう。既往の研究には、考古資料などからヒメ・ヒコ制や聖俗二重首长制の徴証を読み取るうとする言説が展開されてきたものの、墳丘築造規格の検討をつうじて一貫して政祭が分離した王権構造が中期後半まで続いたとする著者の主張は、これまでにない創見に富むものだ。王権構造の復元にはさらなる議論が必要だが、著者の主張を吟味すべき仮説として念頭におきたい。研究者としての著者の後ろ姿を追いかけてきた評者としては、著者が提起する問題を真摯に受け止め

た次第である。と同時に、本書を読み進め、考古学を単なる分類学に押しとどめず、歴史を語ることに注力せよ、そのように訴えかけてくる気概が、本書の大きな魅力の一つと感じた。

以上、本書は日本における前方後円墳の墳丘研究の到達点が表示され、かつ随所に示唆に富んだ言説が開陳された一書として、前方後円墳のみならず古墳時代像や王権論に興味をもつ方々に一読をお勧めしたい。

【註】

（一）筆者は、渡来の技術⇨渡来人が将来した技術とは限らないとの立場をとる。つまり、倭から渡海した人びとが、彼の地で技術などを習得して持ち帰った可能性もあること、そして上記の人びとが倭で製作や築造した所産と、渡来人が倭でつくったものとの間に差異を見出すのが困難なことが主たる理由である。

【引用参考文献】

- 青木敬二〇一七『土木技術の古代史』歴史文化ライブラリー四五三、吉川弘文館
- 浅川道夫二〇〇九『お台場 品川台場の設計・構造・機能』錦正社
- 小澤毅二〇一四『飛鳥の都と古墳の終末』『岩波講座日本歴史』第一巻 古代二、岩波書店一四一―一七六頁
- 久住猛雄二〇一七『3世紀のチクシと三韓と倭国』『シンポジウム魏都・洛陽から』『親魏倭王』印の旅―楽浪・帯方・三韓から邪馬台国へ―ふたかみ邪馬台国シンポジウム一七資料集、香芝市二上山博物館友の会「ふたかみ史遊会」、一九―四七頁
- 澤田秀美二〇一八『前方後円墳秩序の成立と展開』同成社
- 下垣仁志二〇一九『古墳と政治秩序』『シリーズ古代史をひらく 前方後円墳―巨大古墳はなぜ造られたか』岩波書店、七五―一二七頁

白石太一郎二〇一三「考古学と文献史学のあいだ」『岩波講座日本歴史月報』

一、岩波書店、一―四頁

高橋照彦二〇〇五「欽陵と檜隈陵―大王陵最後の前方後円墳」『待兼山考古学論集―都出比呂志先生退任記念』大阪大学考古学研究室七三―七五四頁

東京都港区教育委員会（港区立港郷土資料館）二〇〇二『台場―内海御台場の構造と築造―』

北條芳隆二〇一九「前方後円墳はなぜ巨大化したのか」『考古学講義』ちくま

新書一四〇六、三一五―三四六頁

安村俊史二〇一一【書評】『玉手山一号墳の研究』『市大日本史』一四、大

阪市立大学日本史学会、一四七―一五三頁

若狭徹二〇〇七『古墳時代の水利社会研究』学生社

【付記】

なお本稿は、JSPS科学研究費補助金（20H00039）の研究成果の一部を含む。

（國學院大學文学部 教授）